『ウルスリのすず』とスイスの民俗

2012 年 9 月 9 日　岡部由紀子

「ウルスリのすず」 Schellen-Ursli　が生まれるまで

文：セリーナ・チェンツ　Selina Chönz（1910 – 2000）
スイス、グラウビュンデン州、イン川上流の サメーダン(Samedan) にて生まれ没す。
ベルンにて幼児教育を学ぶ。子ども達のために書いた詩や物語の中のひとつが、
故郷のエンガディン地方を舞台にした『ウルスリのすず』 1945 年

絵：アロイス・カリジェット　Alois Carigiet（1902 – 1985）
スイス、グラウビュンデン州、ライン川上流の トゥルン(Trun) にて生まれ没す。
クールのデザイン工房で絵の修行をしたのち、チューリッヒでグラフィックデザイナーとして
活躍。 故郷に戻ったおり、チェンツの依頼ではじめて絵本の挿絵を描いた。

原作(Uorsin)は、二人の母語であるロマンシュ語 (レトロマン語)で書かれた。
1945 年に出版された絵本はドイツ語。 韻を踏んだ、リズミカルな文体

スイス南東部の山岳地帯、グラウビュンデン州（Graubünden）

この地域には、ケルト人やレティア人が住んでいたが、紀元前15年ローマに征服され、レティア州となる。
先住民の言語がラテン語化したとされるロマンシュ語が話されている。（住民19万人のうち約4万人）
山間の地 (7105. 2km^{2}のうち30%が農耕地、1. 8%が住宅地、他は山と森)
村の佇まい、家の造り、祭の習俗、方言など谷ごとに文化が異なる。

チェンツ　… 州南部のイン川の源流の谷 エンガディン(Engadin))出身
カリジェット … 州北部のライン川源流の谷 スルセルヴァ(Surselva)出身

カリジェットは、エンガディンのグアルダ(Guarda)にあるチェンツの家に数ヶ月滞在
人々の暮らしを観察し、特徴のある伝統家屋をスケッチしながら、チェンツと絵本の構想を練った。

↑
グラウビュンデン州 →

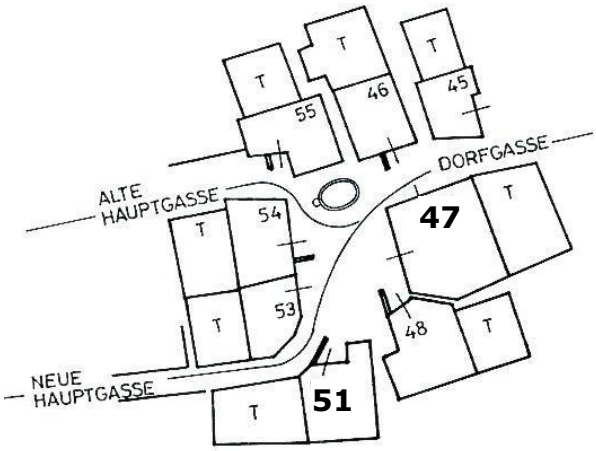
この本の成功をきっかけに、二人のコンビでウルスリ少年の家族の暮らしを題材にした絵本が生まれていった。
『フルリーナと山の鳥』　Flurina und das Wildvöglein　1952年
『大雪』　Der grosse Schnee　1953年

のちにカリジェットは、自分で文も書いた絵本を3冊だしている。
『マウルスと三びきのヤギ』　Zottel, Zick und Zwerg　1965年
『ナシの木とシラカバとメギの木』　Birnbaum, Birke, Berberitze　1967年
『マウルスとマドライナ』　Maurus und Madleina　1969年

物語の舞台は、 エンガディン地方の小さな山村

グアルダは標高1633mにある典型的なエンガディンの山村
人口190人、昔から牧畜が主な生業
山がちで牧草地が十分確保できないため、農家の規模は小さい。
所有する牛の数は少なく、高い山の草でも食べられるヤギが多い。
北に標高3312mの山、Piz Buin を背負う。
その麓、標高1800mから2000mのところに、高地放牧地がある。
農家は高地放牧地に山小屋を持ち、夏の間（およそ6～9月）
そこで暮らした。

家は井戸を中心に建つ



絵本のモデルとなった家のあるグアルダの広場

集落には小さな広場がいくつかあり、そこにある井戸を囲むように住居が建っている。
各家の正面は広場に面し、居間からは井戸が見える。
このような集落の原形は、17世紀、三十年戦争で破壊された村を再建するときにできあがった。

中央にある楕円は、唐松材からできている井戸
生活用水や洗濯場を提供し、家畜の水飲み場でもあった。
古くからの泉を神聖視する民間信仰
→ 鈴をつけた子ども達が井戸の周りをまわる。

左図の、51番の家はウルスリの家のモデル
47番の家にはチェンツの家族が暮らしていた。

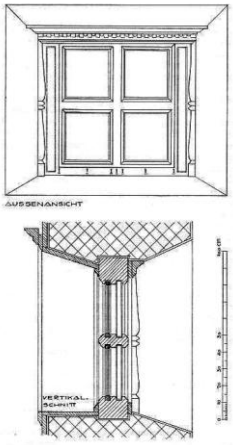
ウルスリの家は、典型的なこの地方の伝統家屋

石組みの家、木組みの家？

伝統的なエンガディンの家は、立派な石造建築風。
石を積んでモルタルで固めた土台の上に、ログハウスのように太い木を組んで作る木造家屋。
芯になる木組みの構造の周りに砕いた石を積み、それをモルタルや漆喰で固める。→ 石造のような外観。
造形に自由がきくので、壁には凹凸がある。

寒さから、家を守る工夫

1メートル前後の厚みの壁。
冷気を入れないように窓は小さい。
窓の内外の壁は斜めに角度をつけて、
光が入りやすくなっている。



窓の構造

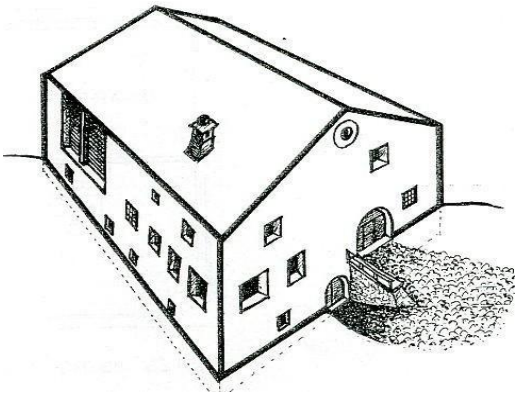
かわいらしい出窓は飾りか？

引っ込んだ小さな窓からは、外の様子が見えない。張り出した出窓をつける。

壁の模様は、スグラフィート（Sgraffito）という技法

壁の表面に二層の色の違う漆喰を塗る。
上の層の漆喰が生乾きの状態の時に、ひっかいて下の色を出す。
ルネッサンス期にイタリアで流行し、1500年～1700年にエンガディン地方に定着した。
家の角の部分や窓枠のまわり … スグラフィートの幾何学的模様
外壁 … スグラフィートの動物（鹿、アイベックス、いるか）、 ロマンシュ語の格言、紋章
生乾きの漆喰に水性の顔料で絵を描いていくフレスコ（Fresko）の技法を用いた素朴な壁画も見られる。

入り口が上と下にふたつあるのはなぜ？



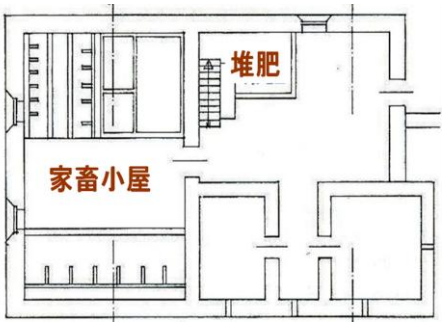
道より少し高い所にある入り口
　人や干し草を積んだ荷車が出入りした。
　扉を全開すれば、干し草を満載した荷車が通れる大きな入り口
　扉は4つの部分に分かれ、人の出入りは中央の小さな扉

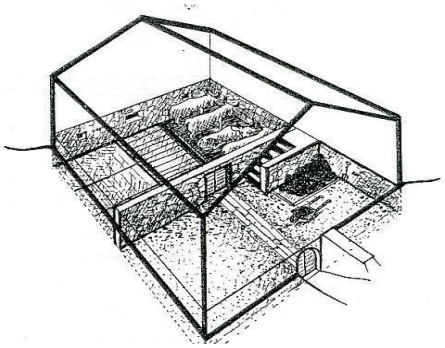
道より下がったところにある入り口
　半地下にある家畜小屋や堆肥の集積場へと通じている。

玄関の脇にはベンチがある
　上の入り口に向かうスロープと、下の入り口へと向かう道との間にベンチを設け、段差の危険を回避している。

堆肥も家の中に貯蔵
　同じ屋根の下に、住居、家畜小屋、干し草置き場、作業場、堆肥や農具置き場があった。居住部分は狭い。

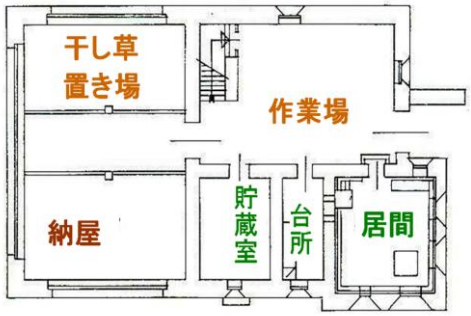
半地下

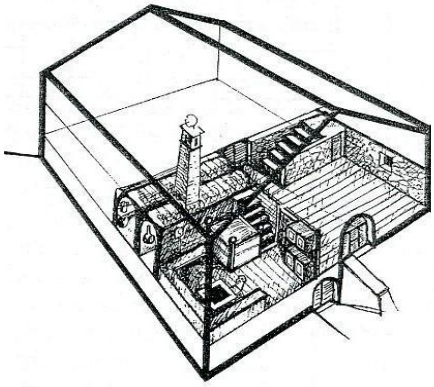


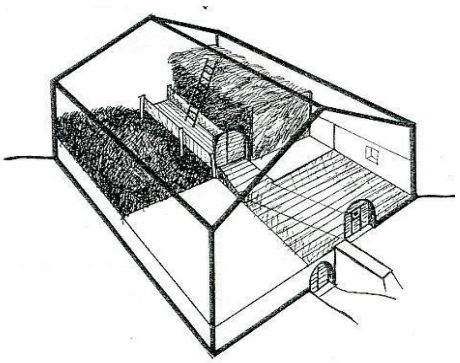


砕いた石をモルタルで固めた土台を兼ねた壁で囲まれる。
天井や梁はトウヒの角材、一階の床を兼ねる。
奥に家畜小屋
手前には農機具やソリを収納
堆肥置き場の横には登り階段

一階

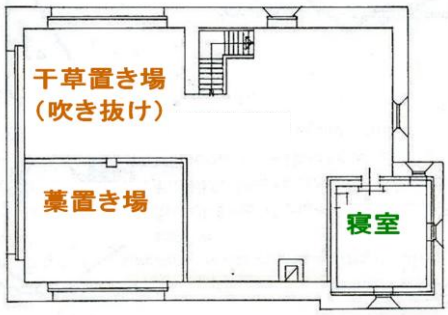


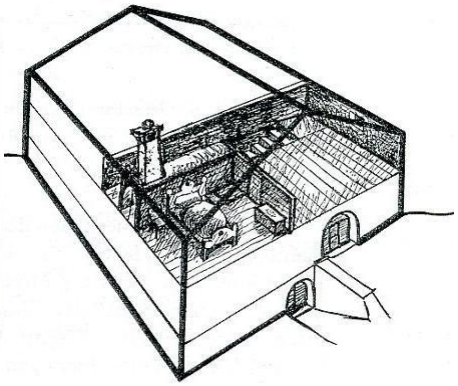




上の入り口の扉を入ると、広い作業場、その奥の扉を開けると家畜の飼料の干し草置き場
作業場の横には一段高い床をもつ居間、松材（Zirbel)で内装を施されている。
居間の隣には、唯一火を燃やせる場所であった台所、その奥に食料貯蔵室。
居間の暖炉の焚き口は台所にある。この暖房ひとつで家全体を暖めていた。出窓は居間についている。

二階





居間からの階段は寝室へ通じる。
寝室の外の空間は、貯蔵室や、使用人の寝室としても利用。

寝室の上の屋根裏は、干し草置き場に利用されることもあった。

ウルスリが井戸の周りを回る行列の先頭にいる

チャランダマルツ　Chalandamarz　(ラテン語　chalanda ＝ 月の最初の日、 marz ＝ 3月)

チャランダマルツとは、どんな祭か？

ローマの暦では、3月1日は年の初め、春の始まりであった。
ローマの新年祭に起源があると考えられる春迎えの行事
グラウビュンデン州の東南部、エンガディンとその周辺の谷にある村や町では、この日早朝から鈴の音が響く。

祭の主役は、「雌牛」と呼ばれる小学生の男の子達。
青い農民の仕事着に赤いネッカチーフ、赤い毛糸の帽子
大小の鈴を肩にかけた男の子達が、年の順に一列に並ぶ。
先頭の年長の子は一番大きな鈴をつける。
後ろに並ぶほど鈴は小さくなる。

行列の指揮をとるのは、鞭や棒を持った年上の男の子。
「牧夫」の役割をつとめる。
「雌牛」たちは、「牧夫」の合図にあわせて鈴を響かせながら、村を練り歩き、あちこちにある共同井戸のまわりを回る。

行列は、村の家々を訪ね、鈴を鳴らし、ロマンス語で春迎えの歌を歌い、お菓子や心付けをもらう。

ウルスリも鈴祭のあと栗を食べたが、食べ物が少ないこの時期、こども達は栗をもらうのを、楽しみにしていた。

ロマンス語の春迎えの歌　1

Chalandamarz, Chalandamarz,	チャランダマルツ（3月1日）、チャランダマルツ（3月1日）
Zapuogns e s-chellas,	大きな鈴に小さな鈴、
faun hoz 'na grand canera,	大きな音色を響かせよう、
lasche cha que's declera,	そうして皆に知らせよう、
hoz es chalandamarz!"	今日はチャランダマルツだと!
Chalandamarz, Chalandamarz,	チャランダマルツ（3月1日）、チャランダマルツ（3月1日）
Zapuogns e sclingas,	大きな鈴と小さな鈴をつけ、
e nus marchains in lingia,	一列に並んで行進だ。
cun gust ans in primgias,	心弾ませ、鈴を振る、 チャランダマルツ、万歳!
Viv' il Chalandamarz!!!"	

春迎えの歌　2

Chalandamarz, Chalandavril,	チャランダマルツ（3月1日）、チャランダアヴリル（4月1日）、
lasché las vachas our d'uigl,	牛たちを小屋から外へ出そう。
las vachas vaun culs vdès,	雌牛は仔牛と、羊は子羊と、ヤギは子ヤギと一緒にね。
las nuorsas culs agnès,	雌鳥たちは卵を産んでる。
las chevras culs uzöls,	雪は融けて、
e las giglinas faun ils övs.	牧草は育っているよ。
La naiv schmarschescha,	僕たちになにかいいものをおくれ、
e l'erva crescha.	そうすれば、神様が祝福してくれる。
Scha'ns dais qualchosa,	僕たちになんにもくれないと、
schi dieu as benedescha,	オオカミに骨まで食べられてしまうよ！
e scha nun's dais ünguota,	
schi'l luf as sbluota!	

（ドイツ語版からの訳：岡部由紀子）

牛追いの行事・アルプ行列 Alpfahrt

アルプスの山麓では、古来移牧をともなう有畜農業が行われてきた。
5月ごろから9月ころまで、家畜は高地放牧地で暮らす。

初夏に村から高地放牧地にある山小屋へ家畜を追い上げるときと、
初秋に村の家へ家畜を追いおろすときは、晴れやかな行列を組む。
ヤギを先頭に、雌牛たちが列になって移動する。
リーダーの牛は、一番大きな鈴を首につけて牛たちの先頭に立つ。

冬の山小屋でウルスリがみつけた立派な鈴は何か？

アルプ行列のときにリーダーの雌牛が首につける飾りのカウベル
小さくても3～4kg、大きいものは15kgもある。
初夏に山小屋に運ばれ、夏の期間は山小屋に飾られる。
秋には、牛と共に山小屋から村の家へと移動する。
冬の間は村の家の暖かい場所に保管される。
冬の山小屋にはカウベルはないはず！

家畜が首に鈴をつけている理由

広大なアルプで、飼い主は鈴の音で家畜の居場所を確認
鈴の音は、昔から魔除けの力があると信じられてきた。

自然が支配する領域である高地放牧地と人間の領域である里との境を越えるときは、特に危険
→ 特別に大きな鈴を鳴らして、邪悪な力から家畜を守る必要があった。

ウルスリが山小屋でみつけたパンは？

村から離れた放牧地は、さまざまな精霊が支配する危険な領域であった。
放牧地での家畜の事故は、精霊の仕業とも考えられた。
民話には、アルプで起こった不思議なできごと、恐ろしいできごとを伝えるものが多い。

山に住む精霊は山小屋での仕事をそっと手伝ったり、牛の乳の出をよくしたりもした。
精霊達は夏の賑やかな放牧シーズンは身を潜め、牛たちが秋に村へ帰ると、山小屋にやってくる。
秋に山小屋をあとにするとき、精霊達のために、パンを山小屋に置いていくのが習いだった。

ウルスリがかじったパンは、この地方のライ麦パン（Bratschadella）、おそらく秋にお供えに置いていったもの。

チャランダマルツの祭で鈴を鳴らすのはなぜ？

越年の際には時の裂け目ができ、そこから精霊や悪霊が現れると信じられていた。邪悪な力や不毛な冬を追い払い、新たな年に豊穣をもたらす力を味方につけるために、鞭をならしたり鈴をガンガン鳴らすことは、アルプス地方に広く行われている風習である。

この祭で鈴をつけた少年達は雌牛と呼ばれ、鞭を持った先導者は牧夫の役である。この練り歩きは、アルプ行列を模している。どちらも、鈴を鳴らしながら危険な領域を無事にまたぐことを祈願する儀礼である。

エンガディンの建築に関する図の出典
I.U.Könz “ Das Engadiner Haus” Schweizer Heimatbücher 1996 Verlag Paul Haupt, Bern

『ウルスリのすず』　Schellen-Ursli　　出だしの部分

文：セリーナ・チェンツ　Selina Chönz　　訳：　岡部由紀子

ここから遠い山の中、高いところに住んでいる
君達みたいな男の子
小さな貧しいこの村の　端にぽつんと立っている
それがこの子の家なんだ

近くへ寄って見てみると　昔ふうの古い家
壁には　絵が描いてある
家の前には　赤と青の服着た夫婦
小さな息子がいるんだよ
ウルスリという名の男の子
ほら、ここへやってくる

この子がウルスリ　よく見てごらん
ちいさな大人のような　山の子だ
頭にかぶる　とんがり帽
山のてっぺんそっくりだ
小屋で寝ている羊の毛からできている
母さんは　編んだり　紡いだり
息子のために　服を織る
父さんは　ウルスリの靴に鋲をうち
いつも　なにかを作ってくれる

ウルスリだって　ちゃんと父さんのお手伝い
まるで小さな雇い人
牛に餌やり　水飲ませ
朝早くから　家畜小屋でそうじする
母さんが　ウルスリ呼べば
すばやく　さっと駆けつけて
水をかついで　汲んでくる
かまどのそばでは　コックさん気取り
なかよしの山羊のミルクは　自分でしぼる
まっ白な泡が　いっぱいさ

家の中や家の外　家畜小屋でのお手伝い
終われば　広場へいちもくさん
村の子みんなと遊ぶため
明日は　鈴行列のお祭りだ
鈴をもらいにいかなくちゃ
大きな鈴を借りようと
大きい子たちについていく

ほらあそこ　ギアンおじさん
ちょうど　家から出てきたところ
祭の鈴をかかえてね
男の子達は大騒ぎ
誰もが欲しがる
一番立派な　大きなカウベル

Hoch in den Bergen, weit von hier,
da wohnt ein Büblein so wir ihr.
In diesem Dörfchen, arm und klein,
ganz unten steht seinHaus allein.

Seht euch das Haus von nahe an:
Alt ist’s, und Bilder sind daran.
Davor in Kleidern rot und blau
da stehn ein Mann und eine Frau.
Sie haben einen kleinen Sohn,
der Ursli heisst; hier kommt er schon.

Das ist der Ursli, schaut ihn an,
ein Bergbub wie ein kleiner Mann!
Geradauf wie eine Bergspitze
steht auf dem Kopf die Zipfelmütze;
sie ist aus Wolle von den Schafen,
die jetzt in Urslis Stalle schlafen.
Denn Urslis Mutter strickt und spinnt
und webt die Kleider für ihr Kind.
Der Vater nagelt Urslis Schuhe
und schafft für ihn fast ohne Ruhe.

Der Ursli hilft dem Vater recht
und dient ihm wie ein kleiner Knecht.
Er hilft ihm füttern, tränkt die Kühe
und wischt den Stall in aller Frühe.
Ruft dann die Mutter nach dem Kind,
so kommt der Ursli ganz geschwind,
geht Wasser holen mit dem Joch
und ist am Herd ein kleiner Koch.
Auch melkt von seiner lieben Geiss
die Milch er selber schäumend weiss.

Hat er dann seine Pflicht getan
im Haus und Hof und am Gespann,
dann springt er fort, um mit den vielen
Dorfbuben auf dem Platz zu spielen.
Heut geht er eine Glocke borgen
zum Fest des Glockenumzugs morgen.
Er möchte eine grosse haben,
drum geht er mit den grossen Knaben.

Da kommt aus seinem Bauernhaus
gerade Onkel Gian heraus.
Er hat die Glocken schon bereit,
und jeder von den Buben schreit
nur nach den schönsten, nach den grossen.